



幼なじみとのイケナイ遊び

試し読み

きっかけはスキな芸人のラジオを聞いたこと。

まえからファンだったものを、長年やっているラジオを聞いたのは初めて。

後輩芸人とやりとりしつつ、得意の毒舌をふりまくのに、途中までは笑っていたものを「おまえらだって、人のこと、云えねんだからな！」とリスナーに矛先がむけられて。

「どうせ、ナオ（ピー）だけじゃ物足りなくなつて、アナ（ピー）にふけてんだろ！この変態どもが！」

前半は察しがつきつつ、後半には首をひねり「ん？」と。

ラジオを聞きおえてから、早速、検索をかけたなり、ラジオのリスナーの眩きを見たりして、基本的なエロ知識しかなかった俺にしたら、雷に打たれたような衝撃を。

まさか、女性の代わりに、男の排便するところを使うなんて……。

自覚をしたなら、意識してエロ動画を見ながら、指をぬちやぬちや。「はあん、だめえ、そこ、ああ、あ、あん、ああん！そんなあ、早く、はう、ああ、そ、こお、あ、あん、あん、あう、ら、めえ……！」

「だめじゃくて、ここがいんだろ？」

ほら、ほら、お漏らしが、どんどん伝ってくるぞ？」

相手の男にイジワルに囁かれて、背筋を震わせ「やあん・・・！」と女性にシンクロして先走りをとるところ。

今まで自慰をしてきたなかで、最高にたかぶって、あんあん乱れて悶えて、びしょ濡れのまえを放ったまま、イキかけたとき。

「おい、さつきから、呼んでんのに、なんで返事しねえんだよ」



愛を語る被告人

高田はひどい男だ。

交際未満の女性の四、五人と、同時に関係を持ち、性欲が湧いたら、場所も時も選ばず性行為をする。

おかげで、どれだけ待ちあわせでドダキャンされ、遊びや買い物途中で抜けだされたやら。果てには俺の家に彼女の一人を呼びだし、おっぱじめたし。

そこまで、やりたい放題、ないがしろにされても、高田と縁が切れないのは、なんだかんだ「やっぱ、おまえがいいわ」と俺のもとにもど

つてくるから。

そのときは、たいてい頬を赤くしているか、顔と体に青痣や引っかき傷をこさえている。

そりゃあ、交際しているかあやふやなまま、複数の女性と肉体関係になれば、いざこざはツキモノ。

「いつか刺されるぞ」と忠告しても、懲りないし聞く耳を持たない。まあ、云うほど心配はしていなく、数多の女性と性行為にふけても「やっぱ、おまえがいいわと」と帰ってくるものと高をくくっていたのだが。

イヤな予感がして、ふりかえり、向きあおうとしたものの、間にあわず、勢いよく片手をパンツのなかに突っこまれて。

「あ！ばか、やめ・・・ん！く、う・・・あ、あう、だめ、だめえ・・・！」
腕をつかむも、筋トレバカとあって、びくともせず。

手荒な真似をしながらも、パンツのなかの手つきは、コマゴマとして、まめまめしい。

痒いところに手が届くというか、俺より俺の体を知りつくしているように「ん？ここがいいんだろ？ほれほれ」と弱点をつきまくり。

「俺は神の手を持つ男だ！」


本気をだせば、カップラーメンができるまで、イカせられる！」

そう豪語していたのを聞き流していたのが、まさか、身を持って思い知らされるとは・・・。

一分も経たずに、完勃ちして先走りだったら、パンツのなかぐちやぐちやに。

「はっ、女より男のほうが、ちんこがあるせいか、股が濡れまくるじやん。」

すっげえ、エッチ。こーんな、赤ちゃんみたいに盛大にお漏らししてさあ？」

A blurred photograph of a hand holding chopsticks in a car's interior. The background shows the steering wheel and dashboard. The text 'ジャーナリストのお色気作戦' is overlaid in the center.

ジャーナリストのお色気作戦

大学に現役ジャーナリストが講義にきた。

俺も将来はジャーナリストを目指しているが、憧れの人はベツなので、講義中は爆睡。

講義後「バイト忙しいのか？」と友人に聞かれ「いや、またクビになった」と応じたら「だったら、ちようどいい」と背後から。ふりむけば、講義をしていたジャーナリスト。

話の流れからして「バイトをしないか」と勧誘。

しかも、コンビニで働くより、ずっと報酬をはずんでくれるとかで。

もちろん、いい話だけに曰くつき。

大体、俺を誘ったのにしろ、ジャーナリストの才能があるとかでなく、成人男性にして一五五センチの低身長の子顔だから。

いまだ中学生にマチガワレルことで、バイトでもトラブルになりやすく長つづきがしないのだが「俺のバイトは、うってつけだぞ」とのこと。

なんと、小学生のコスプレをして接客をする店に潜入しろと。

なんでも、文部科学省の大臣が、その店に通っているという。

とたんに「ああん・・・！」と高く鳴いて脱力し、抱きついてしまう。いつの間にか、大臣も勃起していて、その固いのに擦れた快感はすさまじく、つい絶頂へと。

自分のだけでなく、大臣のズボンも濡らしたのに頬を赤らめる間もなく、半ズボンの裾をうしろに引っぱられて「ひやあうん！」と。俺のはまだまだ元気だから、引っぱらるたび、きつく布に絞めつけられ、尻を跳ねてあんあん。

「あう、んあ、あ、ああん！や、ん、やあ、先、生の、固、く、て、は、はうん、ああ、ずっと、イツちや、あ、あん、あん！」

ズボンを引っぱられながら、大臣のに擦りつけ、胸もすりすりして、小刻みに射精。

死にたくなるほどの、あられもない痴態だが、腰をとめられず、ズボンの下から尻に指を入れても「やだあ、先生・・・！」と言葉だけで、精液を垂れ流し。

薬が効かなくなるまで、大臣のいいように弄ばれ犯されるしかないのか・・・。

一つ屋根の

下の俺と

従弟の事情



俺は従弟にキラわれているらしい。

幼いころは、お互い一人っ子だったこともあり、兄弟のように仲睦まじくしていたのだが……。

従弟の家の事情があつて、しばらく会えなくなり、彼が高校生になつて俺の家で同居することに。

親が夜逃げしたのを同情しつつ「また、昔みたいに兄弟のように」と同居については胸を躍らせていたものの、はじめから俺のまえでは、口をへの字にしたまま、ほとんど話してくれず。

話しかけても「はあ」と無関心で、すぐに顔をそらすし、ろくに目を合わせてくれない。

ツライ境遇なのと、反抗期に突入したこともあり、心を閉ざしているのか。

たしかに俺の親にも、態度はぶつきらぼうながら、でも、礼儀正しいし、いいつけには従順、母の手伝いをよくして「どこぞの、ぐうたら息子とはチガウわね」と（イヤミを含みつつ）褒められているし。

まだ親戚の家族に打ちとけられないにしろ、あからさまに避けているのは、俺に対してだけ。

「あんたがワルイんだからな」と顔を真っ赤に、息づかいも鼻息も荒く、涎まで垂らしながら、頭突きするような勢いで口づけ。

口を開けたまままでいたから、舌を突入され、口内をかき乱されて。

仰天しつつ、手で胸を押しそうとしたら、股間を固いので擦りあげられ「はあ、ん！」と。

「いつのまに勃起したよ！」と目を白黒させるうちに、しつこくしつこく舌をしゃぶられて、股間をぐりぐりされて「ふ、あ、あう、ああ……」と涎を垂れっぱなしに、腰を揺らしっぱなし。

シャツ越しに胸をまさぐられ、突起を指でいじられては、口だけでなく、下からも水音を漏らしだして。

水音に煽られ、頬をかあっとしながらも「こいつ、童貞じゃなかったのか！」と悔しいようで、どンドン従弟の手に落ちていき、あられもなく股をびしょ濡れに。

イケそうで、イケないまま、口づけと愛撫でとことん快感に酔わされ、夢うつつな状態になったころ。

ひっくり返され、伏せた体の、腰を持ちあげられて。